

であつた内梅録將軍 (ic buirug sāngün) bačani といふ人が摩尼教とは大して關係も無かつたと思はれる Kusana の人であつたといふことも、疑惑なしには認められないことと思ふ。然らばこれを Kusana 以外に於て、一層適切に何れかの地に該當せしめることが出来るであらうか。余はこれをも前の哈密や唆里迷と近接の地で、元代には古來用ゐられた龜茲といふ名と並んで、曲先、苦先等の字面で記された今の庫車即ち、Kucha, Kuchar を指したのに外ならぬと考へる。元史や親征録などに屢見する曲先、苦先等の名が Tarikh-i-Rashidi や Zafar Nāma にそのまゝ Kusān (Kūsān) と記されてあり、また Rashid-ed-din の記してゐる Kusān も正しくは Kusān であるべきことなどは、既に論證を経たことである。<sup>19)</sup> 龜茲即ち曲先は回鶻が高昌に據つてから間もなく其の勢力の下に歸することになつた地であるから、この Kusān を曲先に該當させることは Gandhāra の Kusana を以てするよりも遙に適當であることはいふまでもない。そうしてかく見れば、此の文書に生地を記されて居る人々は皆回鶻の勢力下に在つた地方の出身であり、回鶻の官號を有する摩尼教徒として、極めて適當であると思はれる。

只だこゝに顧慮しなければならぬことは Müller 氏の解説したのは佛教文書であり、この文書は摩尼教に關するものであるから、後者の kusān が曲先であるとしても、前者は Gandhāra の Kusana に當ると見て差支ないと主張されるかも知れないことである。併しながら先きに述べたやうに、前者即ち佛教關係の祈願文にも、後者即ち摩尼教關係の祈願文にも共通して solmi, sulmi といふ名が見えて居ることは、同じく兩文書に共通して現はれる kusān といふ名をも同一場處を指したものと解せしめる鍵を與へるものであると同時に、別に余の藏してゐる吐魯